
仮面写真家"ログ"の一生

必殺ファンの一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面写真家”ログ”の一生

【Nコード】

N0343T

【作者名】

必殺ファンの一人

【あらすじ】

「俺は撮る、全ての仮面ライダーをな」

この言葉通り、全ての仮面ライダー世界を旅し、ライダーを撮る事しか興味の無い青年”ログ・レコード”そんな彼の旅に
無理やりな形で付き合わされる事になった青年”新命 未来”
――旅の中で彼は何を見、何を見るのか？

Open Mission (前書き)

小説を書く力も無く、遅い更新ですが、皆さんよろしくお願ひします。

Open Mission

「ついでだ、死ぬ前に良い旅をさせてやる」
「……はあ？」

ええ、皆さん。いきなりで申し訳ないですが訳が解らないです。
あ、やっぱり説明した方が良いでしょう？　まずは僕から、
僕は新命^{しんめい} 未来^{みらい}って言います。正直……良い名前だとは思っていません。

だって……”ダセえ名前”と言われ続け18年、両親が居ない所で可愛い妹にも
ダサいと言われ続け——ぐすつ

……すいません、男の涙なんて気色悪いですよ。
とにかく小学校、中学、高校と良い思い出が指で数えられる程度しかありません。

上履きを燃やされたり、お金を取られたり、クラス中から”クズムシ”と言われ続け、
ジャージをハサミで切られたり、好意を寄せていた人——
の名前を語った”偽ラブレター”に踊らされたり……うつ

……ごめんなさい、思い出すと余計泣きたくなります。とにかく、
恥ずかしながら

”死のう”と昨夜思い立ち、家族が寝静まった時間帯を狙い、実行に移したのですが

——”止められました”黒い腕に、驚いて振り向くと……更に
驚きましたね、ええ。

何たってTVの中の”ヒーロー”が目の前に居るんですから、尻持ちをついても、しょうがないですよ？

ゴホンっ、目の前のヒーロー、バーコードを摸した特徴的すぎる黒い仮面、

多分バーコードを摸したゴツくて平らで両肩と両胸を覆う黒いアーマー、

割れた腹筋を思わせる黒い4つの凸凹、太ももから足首まで続く金色と黒色の長方形の凸凹、全体的に黒が目立つ外見に

最初は”あれ？ シアンは？”と呟いてしまった、恥ずかしい……そう、外見的に仮面ライダーディエンドにそっくりなんです。

ベルトの右サイドに見慣れた形の銃、左の太ももに黒い銃を装備してる以外は

本当に……最初は神様からの遣いと思ったんですがどうやら違う見たいです。

少し、ほんの少しだけ——

たまに見ていた”転生系”かと思いました……ちょっぴり懂れてるんです。

——微笑むだけで友達が出来る……良いですよ。はあっ

「あの、旅って一体……何処へ？」

「直ぐに見せてやる。行くぞ」

「え？ ええ!？」

目の前に……灰色のオーロラが現れました。

オーロラが……どんどん、近づいてきます。此れは……夢なんでし

ようか？ 現実なんでしょうか？
どちらであっても……僕は――

Open Mission (後書き)

この小説のメインコンセプト

ライダーを撮る事にしか興味の無い青年が全ての仮面ライダーの世界を旅する。

はい、これだけです。 ですが、皆さんにお願いしたい事があります。

そう、其々の世界の仮面ライダー、に変身するオリキャラの募集です。

更新は遅くなりますが、皆さまの協力が頂けるなら、しっかりと皆さまのキャラクターを描いて行きたいと思っています。

投稿の詳細については直ぐに其れ用の物を投稿します。

オリキャラ募集（前書き）

この度、募集方法が悪かった事を痛感しました……

御迷惑をおかけして申し訳ありません。

オリキャラ募集

前話のあとがきでも書きましたが皆さまからオリキャラを募集したいと思います。

ですが特に制限も設けず募集すると僕が混乱しますので少しずつ募集したいと思います。

”ファイズ”の世界

時系列…パラダイス・ロスト

募集するライダー…ファイズ カイザ デルタ サイガ オーガ
ライオトルーパー3人まで

投稿テンプレ

名前..

(よみがな)

性別..

身長..

体重..

年齢..

生年月日..

口癖..

性格..

変身するライダー..

オルフェノク (ファイズの世界のみ)

戦い方..

詳細設定

過去

（現在）

以上です。なお変身するライダーが被ってしまった場合、申し訳ないですが僕の一存で決めさせていただきます。

ですがファイズの世界のみオルフェノクとしての登場も考えております。

が、あまり数が多くても僕が捌ききれませんので感想欄でファイズの世界のライダーが埋った場合、その時点でオルフェノクも含めたファイズの世界の募集を打ち切らせて貰います。

もし、解らないなどがあれば気軽に質問ください。

では、皆さまの応募をお待ちしています。

オリキャラ募集（後書き）

改めて……募集方法が悪かった事を痛感しました。

ファイズの世界の次はブレイドの世界……と、変わりはありませんので

ブレイドの世界の話が始まった際にもオリキャラ投稿、感想御指摘、よろしく願います。

i n t e r M i s s i o n & q u o t ; D E L T A & q u o t ; (前書き)

今回は導入部と言った感じで短めです。

i n t e r M i s s i o n " D E L T A " ;

誰にだって……憧れた事がありますよね？ 其れはTVの中のヒーローだったり、ヒロインだったり、凄い活躍をする選手、専門家だったりしますよね？

僕も居ます。 憧れたヒーロー、一目会ってみたいヒロイン、あの選手のように活躍してみたい……なんって、思ったこともあります。

ですけどね……僕の隣に居る”ディエンド？”には、とても憧れなんて抱けません。

迫りくるオーロラに抵抗しようがなく、気が付いたらディエンド？と一緒に風が強いことから何処かのビルの上に来たんだと思う、周りの風景は……とにかくビルが一杯、たまにデパート、多分、都内に来たんじゃないだろうか？
とにかく僕がすべき事は……此れが”夢”か確かめる事。

「あの〜ディエンドさん？」

「俺はディエンドじゃない……ディウオーズだ」

「いえ、あの、僕が聞きたいのは……」

皆さん……いきなり会話の腰が折れました。

とりあえず僕が思うのは此れだけです。うわぁ……物騒な名前——
——じゃないです——！

「……此処は何処なんですか？ いや、そんな事よりも僕を家に――」

「ファイズの世界……どうやら種族間のバランスが崩れた様だ」

「いや、ですから……はい？」

この人……どれだけ僕の話しを聞く気がないのだろうか？

そして、凄く気になる一言をさらりと言いやがりました。

ファイズの世界で……種族間のバランスが崩れた？……皆さん、この言葉を聞いて、

冷たい汗が流れる僕は――正しい反応をしていますよね？

「……言葉より物を見た方が早い」

「は、はぁ……どうも」

僕の心情を知ってか知らずか、ディエンド？

ああ……ディウォーズが新聞を寄こしてくる。ひったくる様に新聞を受け取り、

僕は新聞の内容を食い入る様に黙読する。出来れば、現実であってほしくない、

内容は――直ぐに見つかった。

（2003年6月28日）

【人類解放軍敗北!!】

3日前、解放軍がスマートブレイン”ライダーズ・ギア”生産施設襲撃計画を実行。

しかしSWAT部隊の待ち伏せに嵌り、大損害を負う事になり、残り少ない我々人類は、残り”4521”人となった。あの”青い薔薇”が人々の手に渡ってから……

一ヶ月、一ヶ月でこの有様だ——

我々の希望である”ファイズ”はSWAT部隊の総攻撃を前に敗れた。

カイザも……時間の問題かも知れない、スマートブレインには”帝王のベルト”がある。

スマートブレインと我々人類解放軍の戦力差は、もはや明らかだ——

こんな文しか書けない自分が情けなく思う、希望はあって欲しいと、私は願う。

不確定情報だが帝王のベルトの元になったと言う”デルタギア”はまだ存在すると言う噂がある。

もし、もし……だ、ファイズ、カイザ、デルタ、この3人の戦士が揃えば——

”我々にもまだ希望はあるのかも知れない”

誌記者”姿 誠二”

元三流雑

「……は、はは」

け、決定的だ……！！　とても雑誌記者が書いたとは思えない内容
だけど、
伝えたい事は解る。約60億人いた人類が……今は”4521”人
しか居ない事、
仮面ライダーファイズが敗れた事、あるかどうか解らない”デル
タギア”に
希望を抱かざる負えない程に——”追い詰められている事”

「パラダイス……ロスト」

失われた楽園……確かにピッタリだ、普段身近にあった日常が既に
無いこの世界に、
ピッタリのタイトル——途端に身体力が抜けるのが自分でも
分かった。

「現状が理解できたか？」

土下座状態の僕の耳に、無情とも思えるディウオーズの声が届く。
現状……一番聞きたくない声だ。自分でも不思議なくらい迅速に立
ち上がった。
掴めないけど、掴みかかる勢いで僕はディウオーズに迫る。

「理解しました、理解しましたから！！　僕を家に！！　僕の世界
へ帰してください！！」

「何故だ、旅は始まったばかりだぞ？」

「無理やりじゃないですか！？　僕嫌ですよ、オルフェノクばっか
りの世界で行動するなんて！！」

「問題無い、この世界のオルフェノクは人間に対する興味がかなり

薄れている。

完全な敵対行動を取らなければいい話だ」

「そう言う問題じゃないですよ!？」

駄目だ、向こうが話しを合わせる気が無い……!!

「一度捨てようとした命が惜しくなったか？」

「!？」　　そ、それは……そうですね」

「凶星か——」

突然、ディウオーズが片腕で僕をそっと退かす。そして、黒いスーツの太もも部分に

取り付けられたメタリックブラックが力強い印象を与える長方形の銃を取り外し、

ベルト左横のカードホルダーからピンク色のカード、”ライダーカード”を取り出すと

銃の後部に差し入れている。　今気付いたが、この銃……銃口が突出していない、

右サイドの銃、ディケイド風の言い方をすれば”ディウオーズドライバー”に比べて

二回り程大きい事から、用途が違うのは理解できた。

『DELTA』

「!？」

「レイア、インストールプログラム……スタート」

『ROGER、INSTALL PROGRAM……START』

着いて行けない……!!

実際に仮面ライダーを間近で見るとこんなに着いて行けないものなのか？

「あ、あの？ ええと……」

「お前は見ているだけで良い、ただし堂々としていろ、良いな？」
「え、ええ？」

もう何が何だか——

戸惑うばかりの僕を巻きこんで、灰色のオーロラがまた僕達を包み込んだ。

i n t e r M i s s i o n & q u o t ; D E L T A & q u o t ; (後書き)

次回、斬空さんより御投稿頂いたデルタが登場

……もうちょっと文量を増やして行きたいです。

まだまだ未熟者ですが、皆さんよろしくお願いします。

また、感想御指摘、及びオリキャラ設定投稿お待ちしております。

F i r s t M i s s i o n & q u o t ; D E L T A & q u o t ; (前書き)

正直、頂いた設定の再現が出来るか自信がありません。

まだ話数が短いですが、粗があればどんどん突っ込んでください。

F i r s t M i s s i o n & q u o t ; D E L T A & q u o t ;

2003年10月1日 午後16時04分

”数億を軽く超える青い薔薇” このたった一つの要因のみで世界のバランスが
逆転してから、もうすぐ五ヶ月近い時間が流れようとしている。

私が”人間”として日本中を旅した時間の六分の一の時で、世界は一瞬にして変わった。
オルフェノクが通常として、人間が異端として暮らす世界に成ってしまった。

薔薇の花弁に触れるだけで、人間がオルフェノクに成るなんて思いもしなかった。

——止める術すら持てず、行動も出来ず、世界は変わったんだ。

守って来た人達から”化け物”と呼ばれる事も——
この半年間無い、そして、此れからどんどん無くなってくる。

こんな日を待ち望んでいたオルフェノクが居るのだろうか？
そんなオルフェノクを……私は”倒して”来たのだろうか？
分らない、分らないが……私のやる事は変わらない、3年前から……ずっと!!

「「ムウンッ!!」」
「くっ……!!」

白に近い色をした胴体、ももの付け根、両膝、両足首、両手首、両肘、首、両肩から

犬の様にフサフサな毛が生えている。 ” 外見 ” は段違いに気持ち悪いが、

とにかくその容姿から察する事が出来るのは ” 騎士 ” 虫を摸した様な頭部もまるで鉄仮面、

肩から掌、ももから足先まで鱗の様な鎧、両肩を守る様な盾も存在している。

此処まで鉄に近い灰色は珍しい、そしてもっと珍しいのが———!!?

「くあっ!?!」

《おやおや、噂のデルタもこの程度ですか?》

《残念ですねえ……もっと御強いものだと思っていたんですが>

全く ” 同じ姿 ” をしているオルフェノク……此れは ” 特に ” 珍しいケース。

少なくとも私の経験では初めて遭遇するオルフェノクだ、

しかも強い———個体での能力差を息も乱れぬ剣技の連携で埋めてくる。

” 狭い室内 ” で……だ、正直やりづらいけど———

「この程度で……勝ち誇らないで、格好悪い」

《そうでなくては楽しむ事も出来ませんよ!!》

《その通りです!!》

立ち上がる私に迫りくる、素早い突き”フェンシング”のサーベルに似ている。

だからこそ繰り出す回数が一番多いんだ!!

「やあ!!」

《ウッ》

どっちがどっちか解らないけど、一体の突きをダッキングで潜り抜け、

背後に蹴り……手ごたえを感じつつ、飛び込み前転ステンレス製の作業用机を

跳び越え、透かさず机を蹴り飛ばす。

《ムン!!》

「(私が速い……!!)」

倒れている一体に迫る机を、もう一体が右肩から取り外した盾で防ぐ、

その間に倒れている一体が立ち上がる素振りを見せるが……私にとっては遅すぎる。

《っ!?!》

《ウオオオッ!!》

立ち上がる素振りを見せた一体にデルタムーバーの光弾を御見舞する。

続けて手早くもう一体に光弾を放つ、だけど盾で防がれて大したダメージは

与えられない、そんな事はとうに予想済み——

駆けて来た勢いがプラスされたサーベルの突き……うん”遅い”

「はっ！」

《！？　ウッ！！》

繰り出した右の上段逆回し蹴りでサーベルの軌跡を強引に逸らす。ガラ空きの足にロー、脇腹にミドル、頭部にハイキック、まだ終わらせない。

左足を戻す際、ベルト右サイドにデルタムーバーを戻す。

《ウウウウッ！！》

「はあっ！！」

キックのコンビネーションを喰らった一体の動きを待たず、先程光弾で吹き飛ばした一体が突っ込んでくる。一度連携を崩しただけで、

こうも”モロイ”なんて——突っ込んできた一体にブレーキ代わりの

カウンターハイ、ミドル、ミドル、ロー、ハイキック。

《ウオオオオッ！？》

《ハアアアッ！！》

一体蹴り飛ばしたら、また一体、皮膚が硬くて、タフ……

連携のリズムを戻させずに倒すには少し時間が取られる。

大歓迎だ、地下の武器庫から武器を移している解放軍に対する注意を逸らす時間を稼げる。

乱暴なフック、アッパー、ストレート、

避けるのも簡単、カウンターを合わせるのも——”簡単”

《！？》

「はあぁっ！！」

カウンターパンチで揺らめいた一体に情けなしの左回し蹴り、相手の体は地から浮き上がり力が加えられた方向、つまり窓を突き破る。

《ウワアアアアッ！？》

《に、兄さん！！》

弟？の方が、驚いて言葉を口に出す。意外と普通の男だった。御互い気に障る声だったから、其れに見合う容姿だと思っていたけど――――

此れでお終い”チェック”……この一言は、デルタが唯一持つ必殺技の発動に必要な一言、私はこの言葉を発する……事が出来なかった。

「チェック――（”カシャ”）！？」

突然聞えた、シャッターを切る音、変身した状態でも聞き取りづらい程に小さな音。弟？のオルフェノクにも聞えた様で、

私達を意図せず、同じタイミングで音が聞こえた方向へ振り向いた。

其処には――――

”カシャ”

「どうした……？ 止めを刺さないのか？」

「え……？」

《貴様……何者？》

あまりにも言葉に表すのが難しい人？が居た。 全身を黒銀のスーツに包み、
所々に手首に金色、脚部の突出した長方形の部分に金色と銀色の配色、

そして一番言葉に困るのが頭部を覆う”黒銀の仮面”迅速に適当な答えを探す。

だけど……この言葉しか思いつかない。”バーコード”

そんな人？が大型の長方形の銃、銃口が突出しておらず下に赤いレンズ、

上が透明なレンズと二連装になっている銃を私に向けて構えている。

そして、トリガーが引かれる度に小さな音が耳に響く――――

ガンカメラと言う物だろうか……？

「う、うわああああああああつ！？」

「え！？」

私がバーコードの人？との接し方に迷っていると突然男の子の悲鳴が上がる。

しかも距離的に近い、私は急いで先程オルフェノクが突き破った窓へ駆けより、

状況の確認、水色のジャージ姿、恐らく同年代の男の子が先程蹴り飛ばした

オルフェノクに迫られている。 ダメージが深い様で動きはノロノロしているが、

男の子の方は尻持ちをついて怯えている。 あれでは……！！

「た、助けて……！！ 助けてええええええッ！！」

《ウウ……ッ！！》

オルフェノクが逃げ道のない男の子を目標にサーベルを振り上げる。

「（間に会え……！！）」
”カシヤ”

現状デルタムーバーに残っている最後の一発、

何とかサーベルを弾き飛ばす事に成功した。確認と同時に窓から跳び出し、

メモリーは戦闘開始時に入れたまま、今度こそ発声する……！！

「チェック」 ”カシヤ”
『EXCEED CHARGE』 ”カシヤカシヤ”

いつも通り、ベルトから銃口に伝わるエネルギーを相手に発射、三角錐状に変化した光線、後は……跳び蹴りの体勢で跳び込むだけ！！

「やああああああああああつ！！」 ”カシヤカシヤカシヤ”

途端に景色が変わる———此れは何時もの事、背後には……”死”を迎える者がいる。

《ウオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！？》 ”カシヤカシヤカシヤ”
「……………」

死の叫びと共に……相手は”灰”に成る。この瞬間が、何時も嫌

だ。

分かっていても……心が”チクリ”とするから——でも、今日は……少し違う。

”カシヤ、カシヤカシヤ”

「……………」

この瞬間を撮る——あの人に嫌悪感を覚える。

形が違うとは言え、同じ”仮面”をしている事が

なお腹が腹が立つ、どう言う考えなのか？全く分からないからだ……！！

「ごめんなさい——僕を帰して——」

「っ!？」

突然、オルフェノクに襲われた水色ジャージの子が大声を上げる。

驚いて振り向くと目を瞑ったまま——叫ぶような寝言なんて初めて聞く。

この子には何か叫びたくなるような思いがあるんだろう。

「大丈夫、何時か……共存できる日が来るから」

「う、ん……」

「辛い日々だけど、優しい日が来るから」

右膝について……男の子の御でこを撫でる。

出来る限り……優しく。徐々にだけど、呼吸が落ちついて来ている。

「もう……大丈夫」

「すう……すう……」

自然と頬が緩む”共存”出来る日……何時か来ると良いと思っている。

その日が来るまで……人間の”今日”を守る。やる事は、変わらない……3年前から。

「……………」

ふと、”バーコード仮面”の方へ振り向き、見上げてみると、もう姿が無かった。

此れで良い、あの人には良い感情を持てそうにないから———少しの間、この場に留まってはみたが、弟？のオルフェノクが襲いかかってくる様子は無い。

「……………」

「すう……くう、すう………」

襲いかかってくる様子が無いとは言え、この子をそのまま、と言うのはあまりにも可哀想だ。

「ん………」

「んぐ、ぐう」

「……………ふふっ」

男の子を肩に担ぎあげ、私は解放軍の……”人類”の村を目指す。食糧が少ないと言え、人間一人を見捨てるほど弱ってはいない筈だから———

「レイア”DELTA”の収集率揭示」

『ROGER、36%……36%……36%……3』

「……もいい」

『ROGER』

デルタが新命 未来を担ぎあげ、人類の村に向かい出した時。

ディウオーズはデルタと2体の”スカラベオルフェノク”が戦闘を行った室内に居た。

此れからの方針を整える為だ。

「この世界の仮面ライダーはFAIZ、KAIYA、DELTA、PSYGA、ORGA、RIOTROOPERの6体、全てを撮るには……潜り込むしかないな」

その為には……新命 未来は邪魔になる。

デルタに預けたのは正解だったとディウオーズは判断した。

ディウオーズは……この世界の希望には成りえない、

その事を象徴するかのように、陽は落ちて……月光の無い夜が来た。

F i r s t M i s s i o n & q u o t ; D E L T A & q u o t ; (後書き)

とりあえず、デルタの出番は続きます。

今回、分かりずらいかもしれませんが選択肢を掲示したつもりです。

解放軍の視点から撮るか？スマートブレインの視点から撮るかは……
まだ決めておりません（おい

皆さまから頂いた設定を元に作って行こうとは思いますが
まだどうにも————決まりません。

とりあえずファイズの世界は”カイザ” ”サイガ” ”オーガ”

”ライオトルーパー×3”が残っておりますので

皆さま、ご自由にオリキャラを投稿してください。

必ず登場させて、必ず掘り下げていくつもりですので。

では、此れで失礼します。

s e c o n d M i s s i o n & q u o t ; C A X I A & q u o t ;



皆さん、ようやく完成しました。

出来は……どうでしょう？ 自分で自信は持てませんが――――
皆さんの御指摘、ご感想をお待ちしています。

second Mission " CAXIA ";

戦う事が命の定めか？ 滅ぼされるのが定めか？

人間はオルフェノクを嫌い、オルフェノクは人間を嫌悪する。

元は同じ、愛する母の胎内から父と母の愛の結晶としてこの世に生まれ出た同士。

人間とオルフェノクが解り合う日……今、この言葉は甘い夢でしかない。

どんな命であろうと、死を恐れる。

死にたくないから、殺されたくないから、戦うのだ……人間も、オルフェノクも――――

2003年10月3日 午前10時01分 スマートブレイン本社前

『EXCEED CHARGE』

「はっ!!」

視界が金色の光に包まれる、今から……二体の”ゴミ”を排除するのだ。

逆手に構えたブレイガンを……振り抜く。

「あああああああっ!?!」

消えた、簡易ライダーズ・ギアを纏っていた”ゴミ”は灰と成った。

「……ふう」

「「「「「………」」」」」

「「「「「………」」」」」

もう、30分近く戦闘を続けている。

何度ゴミを冥土に送ったか覚えていない、

今回与えられた役割は”帝王のベルト”奪取の為の時間稼ぎ。

周りはたったいま葬った2体と同じスーツを纏ったのが15体、
もう少し暴れていればもっと来るだろう。ほら来た。

「何をしている！！ 相手は一人だ、撃って撃って撃ちまくれ！！」

「は、はい！！」

数打ちや当たる……間違っていないけど、試してみましようか？

「はっ！！」『EXCEED CHARGE』

前方の集団に向かい駆けだす。 まとまりのある射撃体勢を取り手にした

銃剣から放たれる線上の光弾。 ブレイガンの刃で楽に弾ける。

引き金を引くタイミングは既に掴んでいる、楽な仕事。

「——ッ！ 各自散か——」

「やあああああっ！！」

今度は6体……ブレイガンの光刃で陣形を崩して直ぐ、手近のゴミを

”カチッ”

「う、うあああああつ!!」

「いい加減、面倒ね」

フォンブラスターの光弾、1回の射撃で3発放てるバーストモード、こいつら程度なら動きも止まる。弾が無くなったブレイガンに再装填する為の

レバーを引こうとした時。突然、突然だ、背筋が……寒くなる。

『ATTACK RIDE……BLAST!!』

「ッ!？」

一番に気づいたのは……私だった、6m上空に現れた黒い光球。

周りが気づいた時には……”光弾”と言う名の黒い雨が降り注ぐ。

「ッ!! は、はあつ!!」

「「「うわあああああああつ!!」」」

「「「ぎやああああつ!？」」」

一発目をブレイガン、二発目を右回し蹴り、三発目をバックブローで弾く。

が、威力が高い……弾いた両手、片足に痺れが生じる。

ふと、気付けば……周りに居た”ゴミ”が居ない、全て……灰に成っている。

「何処……何処から？」

今のスタイルでは、危険が大きいかも知れないと考え、私はカイザフォンをベルトに戻し、メモリーをブレイガンに挿入し

た。

『READY』

『CAXIA、INSTALL PROGRAM……START』

「ッ!？」

突然上から聞えた、クリアーな女性の電子音、見上げた瞬間、何者かが繰り出す。回し蹴り、私は弾ける様に右へ跳んだ。前転の後、即座に振りかえる。 其処には――――

「だ、誰……？ 貴方……？」

「ふむ……」

私と同じ様に、強化服を纏う者。特に目を引くのがバーコードを

摸したかの様な

黒い仮面と大型の長方形の形をした二連装銃、銃口らしい二か所には赤、

及びクリアレンズが存在しており分類的にはカメラガンだろう。

何者なのか、其れはこれからの問答で解る。

「答えなさい、貴方は何者？ スマートブレインに属する者？」

「違う……俺はお前を撮る者だ」

「―――其れにしては……随分乱暴ね？」

「怒ったか？ なら都合が良い、思い切り来い。 満遍なく撮ってやる」 ”カシャ”

「……上等!！」

私に向けられ切られたシャッター音、その行為を挑発と受け取った私は、一気に駆け出す。

訳も理解できず、名前も知らぬ不愉快な相手……は、カメラガンを

私に向け構えるのみ。

「(————いらつかせる!!)」

さつきからカシヤカシヤ耳に響くシャッター音、煩わしい……!!
もはやオルフェノクであっても、人間であっても、
どちらでも良い————私は……コイツが気に入らない!!

「……やあ!!」カシヤ

「ふっ……」カシヤカシヤ

「————笑うなあ!!」

当たらない、当たらない当たらない!!

私が振るう剣が、繰り出す拳が————全て避けられる。

「どうした、攻撃パターンが単調になっているぞ?」

「——ッ、喋るな!!」カシヤ

「黙らせてみる……其れも撮ってやる」カシヤカシヤ

大きく振ったブレイガンは奴が大きく後ろへ跳んだ事により、空を斬る。

息が……切れる、此処まで面倒な奴とは————っ!!

「——くっ、やあああっ!!」

「いいぞ……その調子だ」カシヤカシヤカシヤ

「ッ!! 何処まで私を馬鹿にする!!」カシヤ

くっ————!! 手ごたえあり————でもっ!!

「今のは……良い絵だった」

「く!! ふ、くううっ!!」

力の限り振ったブレイガンの刃は……相手の肩を、斬れない。
どれだけ力を込めても……コイツの体が動かない——っ!!

「今日は此処までにしよう」

「が——っ!？」

腹部に強い衝撃……体が高く浮き上がり、着地も出来ず倒れる。
私とした事が……感情的になりすぎたの？

「次も良い絵を頼むぞ？」

私を見下ろしながら、そう言い残し……黒い奴は灰色のオーロラは
潜り抜ける。
そうして直ぐ、オーロラも消えた。 つ、ぎは……必ず、消してや
る!!

「……くっ」

殴られた腹部がまだ痛む……立ち上がる、この簡単な動作に手間取
りつつ、

私は、気分とは真逆な着メロを鳴らすカイザフォンをベルトから抜
き取り、

電話携帯に変形、キーを押し耳に当てる。

「……何？」

『冴華さん、また失敗だ!! 急いで其処から離れてくれ!!』

「——分かったわ、貴方も気を付けて」

『ええ、それじゃあまた!!』

即座に電話を切り、ベルトへ戻す……此れで4度目の失敗、何度同じ失敗を繰り返せば気が済むのだろうか？

そろそろ……”水森”を消す事を考えなければいけない様ね。

「っ、はっ!!」

耳に響く噴射音、私は即座にブレイガンのレバーを引き、右へ大きく跳躍――

爆発、コンクリートの破片が辺りへ飛び散り、生じた赤黒い炎が燃え上がる。

回転の勢いで立ち上がり、ブレイガンのトリガーを引く。

「ハアッ!!」

「――!!」

続いて放たれた”ロケット弾”はフォトンブラッドの弾丸に迎撃され爆発。

生じた爆炎から、三体の”ゴミ”が姿を現し、手に持つ短剣を振り下ろす。

反応が遅れた私は体勢を屈め、ブレイガンの刀身で防ぐ。

「死ねえ、カイザアアッ!!」

「――ちっ」

剣に力を込める一体のゴミの言葉に、私は怒りを覚えた。

理由など無い……”こいつ等には”そう、あの”黒い鎧の男”……!!

「「「うう!?!」」」

私を知る限りベルト使用者が使用するマシンの中でも最速の”ジェットスライガー”

一気にスマートブレイン本社前から遠ざかっていく――

私は今だ残る苛立ちを……コックピットに座る”デルタ”に吐き捨てる。

「礼は……言わないわよ」

「……構わない」

こうしてしばらく、解放軍のアジトへ着くまで……私達は一言も喋る事は無かった。

2003年10月3日 午前11時04分 スマートブレイン本社

暗い室内。趣味の良いデザインだった事は覚えているがある闘いで目をやられた

私には見ることはかなわない――今現在まで見ていた映像はデルタが操縦する

形式番号”SB-VXO” 名称…ジェットスライガーが飛び去る所で映像が切れた。

「はぁーい社長さん♪ 此れでリアルタイム映像は終了です♪」

「……分かっています。」

「もう、社長さん そんなに怖い顔しないの♪ 此れから大事なお話があるんですから♪」

「……君はしばらく黙っていなさい」

「はぁーい！ 黙ってます♪」

……この女とは長い付き合いだが、どうも会話が噛み合わない時が多々ある。

当初は気に成らなかったが、首から下を失った今となつては、この女無しに動く事も叶わない。

何と情けない事か、そもそも、あの時”ファイズ”との戦いに敗れさえしなければ――――

『村条君……何時まで人間を生かしておくつもりかね？』

いけない……今は、あの屈辱を思い返している時では無い、今私が話している人物は、少なくとも……私より遥かに立場が上なのだから――――

「ペースは遅れている様ですが確実に人間の数減っています。何か問題が？」

『その遅れが気にかかるのだよ……人間解放軍は3本のライダーズ・ギアで

成り立っていると言って良い。その内の一本”ファイズ”の行方が知れない今この時こそ、

人類を殲滅するに相応しいと、私を含めた世界中の幹部の意見だ』

「成るほど……では、今後の日本支部の意向をお伝えします。レディ」

「はぁーい♪ ではこのデータをご覧ください♪」

私は伝えた……人類側を完全に滅ぼし、完全なオルフェノクの世界の安定を齎す。

”非常”に簡単な計画を――――

『了解したよ、村条君……恐らく他の幹部達もその案には納得する事だろう』

「ありがとうございます」

『後は……君の計画にも必要な”帝王”のベルトの件だ。天の帝王の資格者は既に決まったそうだね？』

「はい、坂下要……能力、性格を考慮し”サイガ”を扱うに相応しい人物だと私は考えています」

『うむ……問題は”地”の帝王だ、聞く所にもよれば志願者すら上がらないそうじゃないか』

悩みの種を……帝王のベルトは”ファイズ””カイザ””デルタ”これ等3本のベルトを上回るフォトンブラッドでスーツを形成する。凄まじいエネルギー量の”フォトンブラッド”に耐えうる強力なオルフェノクで

なければ”サイガ””オーガ”に変身する事は叶わない。中でも”オーガ”のフォトンブラッドは

凄まじい……オルフェノクの中で特に”上の上”の存在でなければ……”2度目の死”を迎える。

今まで……”1万9016”ものオルフェノクがオーガのスーツ形成に耐えきれずに死んだ。

「近い内に更なる候補者を選出する為の戦闘訓練を実地する予定です、参加者はSWAT部隊の中でも特に優れた者達で行います。」

『代用案があるならば其れで良いだろう……村条君、最後に聞こう分かって……どう考えても、リアルタイム映像に映り込んだ”あの戦士の事だ”』

『あの、未確認のギアを使用した戦士……君はどう見る？』

「現状では何とも言えませんが、この後すぐに調査チームの編成、SWAT部隊への通知を行います」

『……其れしか無いか、村条君、次の成果も期待しているよ』

通信が切れた……現状あの戦士については、放置しても構わないだろう。

興味深い対象ではあるが、居場所が掴めないのでは対処のしようが無い。

「社長さん♪ 眠そうですねーお休みになりますか♪」

『ええ、3時間限り、睡眠を取ります。何時も通り———』

「部屋には誰も居れませうん♪」

……眠るとしましょう。

s e c o n d M i s s i o n & q u o t ; C A X I A & q u o t ;

(後)

次回はしばらく放って置きっぱなしの新命君の視点で行きます。

ファイズの世界の募集も後は”オーガ”のみです。
皆さまの御投稿、お待ちしております。

t h i r d M i s s i o n " P S Y G A "

(前書き)

ええ、皆さま、お久しぶりです。ごめんなさい。

久しぶりに、ちょびつとずつ書いていきます。

相変わらずの亀更新ですが、よろしければ……どうぞ。

third Mission "PSYGA";

夢を見ていた……今まで見た事も無い様な夢。

その夢での僕は、透明だった。周りの”大部隊”は僕が見えていない。

現実でも他人事でしか無い光景を僕は今見ている。

5000人を超える強化服とヘルメットを纏い、たった一人を襲う壮絶な光景を。

《う、うわあああつ!!》

降り注ぐミサイルの雨、痛くないと、夢と解っていても……怖いものは怖い!!

爆発、爆発、爆発……下手な内戦よりも激しい戦場を、勇猛果敢に駆ける赤と黒の戦士。

その戦士は片手で銀色のバイクを巧みに操り、赤き剣を振るい、多対一の不利を感じさせない

闘いぶりを魅せている。その戦士の名は……”ファイズ”、今戦っている”ライオトルーパー達の

元になっている……と、僕は思っている。

「はああああつ!!」

僕はファイズの声に、鬼気迫るものを感じていた。絶対に引けない……絶対に負けられない。

そんな強き意志を、僕は感じている、”始めて”……感じている。

そんなファイズにライオトルーパー達は数と、マシンの質で押しつつあった。

サイドバツシャー、ジェットスライガーのミサイルの雨が絶えず降りかかり、生じる爆発を

巧みにマシンを操り、避けつつ闘い続けるファイズとジャイロアタッカーを駆るライオトルーパー達。

しかし……次第にファイズが追い詰められている。

「!?　ぐあ!!」 『battle mode』

絶えず銃撃に晒されるファイズの不意を突いた形で

ライオトルーパーの奇襲銃撃がファイズの身体をマシンから吹き飛ばす。

が、吹き飛ばされ、地面に投げ出されるファイズを庇い、ファイズを援護するのは、

先程までファイズが誇っていた銀のマシンがロボットに変形した”

オートバジン”

引き離されぬ様、常にファイズの背中を守り続ける鉄の巨人の存在はファイズの支えの様に見えた。

善戦が続いているファイズとオートバジン……しかし、限界が迫りつつある。

『ピ、ポポ……』

「——ッ!!　ちくしょお!!」 『Complete』

ファイズを庇い、中破したオートバジン。

打開策として、ファイズは左腕のリストウォッチ型デバイス”ファイズアクセル”の

メモリーを引き抜き、ファイズフォンのプラットフォームにメモリーを装填。

胸部装甲が開かれ、赤い線が銀色に、黄色の眼が、赤色になった。

『Start up』

フォームチェンジしたファイズがファイズアクセルの赤いスイッチを押すと、

ファイズの姿が、突然消えた……瞬間、周囲のライオトルーパー達が次々に吹き飛ばされていく。

1秒、2秒、3秒、1秒事に二十数人が吹き飛ばされ、灰になる者が出ていた。

「う、うわああああっ!!」

「に、逃げるな!! 防御を固めろ!! 10秒過ぎ———ぐわあっ!!」

4秒……隙を見せ、逃げだす者達が次々に赤き閃光の前に倒れて行く。

5秒……地上のライオトルーパー達の混乱を納める為、ジェットスライガーに乗っていた

ライオトルーパー達がミサイルを発射しようとした瞬間、

浮遊していたジェットスライガーに乗っているライオトルーパー達が次々に灰となる。

6秒……ファイズは標的をサイドバッシュャーに定め、エッジのメモリーを引き抜き、

ジェットスライガーのコックピットを蹴る。空中でファイズポイントにメモリーを差し込み

右の腸脛に装着。

「——っ!？」

「く、くそおおっ!!」

7秒……サイドバツシャーを駆るライオトルーパー達の頭上に
円錐状の赤いポイントマーカーが現れ、身体をロックされる。

『3……2……1……Time Out』

「「「「「「うわあああああああああつ!!」「」「」「」

」」

”アクセルクリムゾンスマッシュ”……ライオトルーパー達の頭上に
現れたポイントマーカーが
彼らの体に突き刺さり、青白い炎に包まれ……身体の灰化が始まる。
そんな彼らの最後を看取りながら……ファイズはアクセルメモリー
を抜いた。

『Reformation』

胸部装甲が元の場所に戻り、銀色のラインが赤色に、赤い眼が黄色
に戻った。

ファイズは痛みと疲労が蓄積した身体を押して、ポインターのメモ
リを引き抜き、

ファイズエッジにメモリーを装填、バイクハンドルから赤い刀身が
伸びた。

駆けだそうとした瞬間……ファイズに――――

《ファ、ファイズウウツ!!》

「うわあああああああつ!!」

ミサイルの雨が降り注ぐ――――僕は……叫ぶ事しか出来なかった、
ただ、ファイズが爆炎に吞まれていく光景を、見ている事しか出来

なかった。

「…………ッ!？」

やけに現実感のある闘いの夢から、僕は逃げる様に飛び起きた。
荒い息が、止まらない……冷たい汗が背中を流れている。身体
の震えが止まらない…………!!

「(嫌だ……もう嫌だ!!)」

何で僕がこんな目に合わなくちゃいけないんだ、何であんな”夢”
見なくちゃいけないんだ!!
何が……何が……!!

「良い旅をさせてやる、だよお……!!」

涙が止まらない……悔しい、怖い、どうしようも無く、怖い。
こんな目に遭うんだたら……出会う前に死…………

「おお、起きとったか」

「…………ッ!？」

突然現れたおじさんに僕は、反射的な引いてしまった。一応、男の
プライドとして
涙を見られたくないっていうのと、スキンヘッドに黒いタンクトッ
プとジーンズを盛り上げる
筋肉質の体をしたおじさんにただ、驚いてしまった。

「はっはっはっ、そんだけ元気があるなら、心配はなさそうじゃのう!!」

「わっ——?」

おじさんに勢いよく背中を叩かれた僕は、ベッドから転げ落ちそうになるけど、何とかこらえて、気付く。

「……ここ、は?」

「ん? おお、此処はワシの家じゃて、たまにお前さんの様なのを預かっては面倒を見ておる」

「はぁ……ありがとうございます」

「はっはっはっ、こんな時代じゃ、其処まで気にする必要は無い、どれ、食事でも持ってこよう」

「あ————っ」

おかまいなく————が、出る前におじさんは行ってしまった。とくに何をすると言った事も無い僕は室内を観察する事にした。今僕が居る室内は以外と広い、今では懐かしい僕の部屋と其れほど変わらない。

其れと————

「物が此れだけだからかなあ……」

ベッドの隣に置かれた木造の子机と日光に当てられて元気そうに伸びている観葉植物。

それに、少し離れたタンスの上には少し古そうなラジカセ……物が此れだけしか無いから、

広い部屋が余計に広く感じられる。 外の様子が気になる僕はベッ

ドから起きて、窓を開く。
其処には――

「……………」

思わず鍰を飲む……ただ、雑草や他の草が伸びに伸びきったただけなのに、

どうしてこんなに綺麗に見えるんだろう？ 僕は夢の事をすっかり

忘れて少しの間、

目の前に映る光景を見ていた、今まで目も向けなかった光景を――
――りんご？

「今はこんなもんしかなくてのお……ま、我慢してくれ」

「い、いえ……頂けるだけでもありがたいですよ」

「はっはっはっ、そう言うてもらえると助かるわい」

そう言っておじさんは手に持ったりんごに豪快にがぶり付く、
僕は真似して……出来ないから、少しだけ――！！？

「ば、爆発……！？」

「――ッ、坊主、ワシの指示があるまで大人しくしとれ」

「え、ええ？」

僕の返答を聞く前に、おじさんは足早に他の部屋へと走って行った。
無論どうしたらいいか解らない僕は、ただ立ち尽くすしかない――
――

「な、なんじゃとお！！ 何故サイガが！？ い、いや、解ってお
る。ワシも出る！！」

カイザとデルタも直ぐ帰ってくる筈じゃ！！ 其れまで持たせるん

じゃぞ、良いな!!」

こっちにまで響く怒鳴り声で……おじさんは慌てていた。

い、いや……そんなことより——サイガ？ あ、仮面ライダーサイガ!？」

「（あ、あんな奴が……近くに居る!?!）」

お、大人しくしていよう……おじさんの怒鳴り声から推測すれば、サイガが現れたのは

此処からは離れているらしいから、大人しく待っていれば——
——待っている、だけで——

「おう!! 坊主、すまんがしばらく此処で——」

両手にハンドガン、背中にマシンガン二丁抱えたおじさんが足早に入ってきた。

言うなら——今しかない!!

「あ、あの!!」

「な、なんじゃあ……!?!」

「ぼ、僕も……僕も連れて行ってください!!」

変化、成長……其れは、何時だって突然訪れる。

t h i r d M i s s i o n & q u o t ; P S Y G A & q u o t ;

(後書き

ええ、皆さん、この作品をほうっておいて

約半年……ようやく、次の話しを書けました。

お待たせして申し訳ありません。

F o r c e M i s s i o n & q u o t ; R I O T R O O P E R & q u o t ; .

案の定ですが、ちよびつとずつ進めて行きます。

Force Mission " RIOTROOPER".

2003年10月5日 午前11時22分 都内、スマートブレインコロシアム1

此処は都内に設置されたコロシアム……と言っても元あったドームを改良したのが現状だ。

この場所に、約2500人のライオトルーパーが集められている。

その目的は……地の帝王”オーガ”の所有者を決める事、迅速に決める為に3万人居るSWAT部隊の中でも

特に優れた5000人を選び出し、その半分の人員を別の場所に分けてのテストを行っている。

そして、約2500人のライオトルーパー達の中でも、特に優れた3人が居た。

「やっちゃる、やっちゃる♪」

「ぐあ……このおっ!!」

雪城 美春……ライオトルーパーの専用武器”アクセレイガン”二刀を軽々と使用した戦法が得意であり、彼女の華麗な二刀捌きを前に、幾人ものライオトルーパーが敗れ去る。

「やああああって、やるぜえええっ!!」

「う、うお!?!」

雪城 真夏……名字の通り、美晴とは兄妹関係にあるが、彼女は対照的な豪快な戦い方で相手を圧倒する

スタイルかと思いきや、適所適所でアクセレイガンのモードチェンジを使いこなし、相手を完封するケースが多く、彼の相手をしたライオトルーパーもこのスタイルに敗れ去っている。

「うあああつ!!」

「……甘いな」

雪城 秋……真夏、美晴の兄である。常に相手のペースを握り、体力をジワジワと削り、
カウンターで止めを刺す戦法にこのテストに参加したライオトルーパー達は傷一つ付ける事が出来なかった。このドームでの戦闘テストの結果は――――

「楽勝、楽勝♪ 準備運動ぐらいにはなったかなあ」

「全くだぜ……もっと骨のある奴はいねえのかよ。」

戦闘テストで最後まで生き残ったライオトルーパー3人がコロシアの中央へ集まってくる。

一人は美晴、もう一人は真夏、生き残ったのは……彼ら3兄妹達。

「夏、春……調子に乗るな、まだ最後の戦闘テストが残っているんだぞ」

「つつ、てもよお秋、此処に集められたのはSWATの中でも特に優れた――」

「2447人なんだよねーこんなに詰まんないとは思わなかったよ」

「てめえ、春!! 俺のセリフ獲んなよ!!」

「言うのが遅いんだよお」

「てめ、こら待て、春!!」

「待、ちません」

コロシウム内ではしゃぎまわる二人にため息しつつ、秋は二人の意見には賛成だった。

3万人いるSWAT部隊の中でも屈指の5000人、の半分2497人の同胞たち。

だが……自分が把握している限り、此処に集められたのは自分達兄妹と比べれば

2ランク落ちるメンバーだった——だとすれば——

「（もう一方のコロシウムに集められたのか……？）」

もし、だが……それでは、おかしな可能性が浮上してしまう。

しかし、直ぐに首を振る。 秋の中では絶対にあり得ない事だと思うからだ。

「（いや、ありえんな……俺達を”意図的に”最終テストまで残そう、などと——

此れは、驕りだ……俺自身の、気を引き締めねば」

瞬間——巨大モニターが起動する。

すると先程まではしゃいでいた二人も慌てて秋の元へ集まってきた。其れも当然なのだ、モニターには、”スマートブレインのトップ”が映り込んでいるのだから。

《貴方がたが、コロシウム1での認定テストを生き残った方達ですね？》

「はい……雪城 秋、真夏、美晴、いかの3名です。」

隣の二人は大人しくしている……もし口でも開こうものなら秋の胃が黙ってはいない。

——秋の冷静な対応に、モニター先の人物は口元をニヤリと歪

ませた――――

《ほう……SWATの中でも上の上の方達でしたか、この様な形ではなく、面と向かって話したかったですね》

「……光栄です、村条社長」

「（うわぁー聞いた夏？ 社長さんが私達の事褒めてくれてるよぉー）」

「（だなく、こりゃもう1クラス上の暮らしも夢じゃないぞ！！）」
「（頼むから黙っていてくれ二人とも……！！）」

「ライオトルーパー同士が”交信”し合う為の機能”ライオットファイラー”、

ライオトルーパーのヘルメット頭上に装備されているこのアンテナの機能を存分に扱っている

二人に、秋は胃に穴が開くかのような気分襲われた。が、村条が救いの手を差し伸べてくれた。

《貴方がたの相手ですが……現在、コロシウム1に到着した様です。そのまま待機しててください。》

「了解しました」

《ふふっ……健闘を期待していますよ》

村条がそう言った瞬間、巨大モニターの電源が切れた。

秋は心底ため息し……夏と春は少々舞い上がっていた。

「えへへ、健闘を期待しています、かぁー気合い入るなぁー♪」

「へへっ、確かに気合は入るな、今ならどんなのが来ても楽勝な気がするぜ！！」

「……二人とも、油断はするなよ？」

秋の一喝に、二人は揃って振り向いて

「「わかってるって、心配ご無用!!」」

「……はあ」

なんだかんだで……彼らは仲の良い兄妹だった。

——そのやり取りから30分が経つ。

「……」

「……………ちい!!」

「むう!!」

30分……長々とコロシアムの中央で待たされていた3人は一人を除いて、苛々が頂点に達しつつあった。

「おせえ……遅すぎるぜ!!」

「————遅おおおおおい!!」

「二人とも、落ち付け、相手側に何かあったのかも知————」

『ATTACK RIDE、BLAST!!』

秋が異様な気配に気づいたのは、偶然だった。だが、気づかなければ————”死んでいた”

「「————っ!!」」

「二人とも散れ!!」

3人の上空に現れた黒い光球、光球から光の雨が3人に降り注ぐ、秋は散会の指示を出し、自らに降り注ぐ、驚異を払い、避けて行く

————

「ちょ、きつくない!？」

「黙って斬ってろ!! ある程度は俺が落とす!!」

春が華麗な剣捌きで、光弾を斬り払い、春が対処できぬ光弾は夏が撃ち落とす。

3秒後……光の雨が止み、上空の光球が消えると、コロシウムに握手が響く。

「……？」

「む……誰だよ、拍手なんざしやがって!!」

「ちょこおおおおっと、空気が読めてないよね!!」

そう苛立ちつつも二人は秋と合流しつつ、拍手の相手を探す。

秋は二人とコロシアムの周囲を見渡すが相手の姿は見えない。

そして……突然——秋の耳に”カメラのシャッター音が響いた”

「——春!! 後ろだ!!」

「え、うわ!？」

兄の叫びで、背後へ振り向く春。

アクセレイガンによる切り払いは出来なかったが、其れによって防ぐも尻持ちを付いてしまう。

秋と夏は春の前に出つつ、アクセレイガン計3丁による、迎撃射撃で応戦する。

相手は——二刀の”アクセレイガン”で二人の銃撃を切り払った。

「……ライオトルーパー？」

「——てんめえ!!」

「——質問がある、此れは何の真似だ？」

相手は、自分達と同じ”ライオトルーパー”だと言うのに”ライオットファイラー”による交信に応じない、
秋は二人に交信能力で、指示しつつ、目先の”敵”に問いかけた。
目先の敵は、片方の剣を過多に置き、もう片方の剣で……此方を差してきた。

「合格だ……お前達は俺が撮ってやる」

「「ああっ!?／＼はあっ!?」」

「————ふざけた解答だ」

3人の苛立ち、怒りの視線をまるで気にせず、敵は2・3回指を鳴らし、答える

「俺は真面目だ……ふざけて等しい」

「夏、春、遠慮はいらん様だ————一気に行け!!」

「「ああ、やってやるぜええ!!／＼うん、やっちゃんううっ!!」」

秋の援護射撃を受けて、気合い充分に二人は駆け出す。

「ふっ……」

秋の援護射撃は直接的に狙わず、敵の足元や進行方向、回避方向に向けて放たれる。

其処に白兵戦能力に優れた夏と春のコンビが斬り込む。

まだ人類解放軍に味方するオルフェノクが多かった時期に、よく多用した戦法だ。

少しシンプルだが……三対一、其れも自分達一人一人よりも力を持つ敵に対しては実に有効的だった。

しかし、今回の相手には————”役不足”の様だった。

「————この、何で!？」

「少し荒い……!!！」

「くうっ!？」

秋の援護射撃で体勢が崩れた所を春が斬り込む、上下から繰り出される高熱の牙は、

亜が覚えている限りSWAT部隊での模擬戦、そして実戦において今まで外した事が無い。

だと言うのに……奴は、ストレートキックのみで崩し、隙を突き放った筈の光弾は難なく避けられる。

「春、続けよおっ!!」 「わかってるよお!!」

「こっちも荒いなあ……くくっ」

「————なめんなあ!!！」

夏が繰り出す怒濤の攻撃、そして、秋の援護射撃を奴は、躲す、まるで舞い散る木の葉の様に————

適度に援護ポイントに移動しつつ、秋は実感しつつあった。 奴は

「（”勝つ事”を目的にしていない……ならば、何だ？）」

攻撃を弾き、かわしはしても……倒そうと言う意識が無い。

だが、今回のテストでの勝利は地の帝王”オーガ”のベルトの資格者へ進む為の一步。

いかに大勢の同胞達がその鎧を纏えず、死んでいった事実があっても、

自分たちオルフェノクに取って誇り高い事であるのには変わりが無い————

その”勝利”への意思が無いのならば————答えに近づきつつあると感じる秋に”交信”が届く。

『秋……何か良い策思いつかないの！？　悔しいけど、コイツ……！！』

『くそ！！　身体のあるところに目があるんじゃないかコイツ！！』

戦闘開始から15分……此れまでかすり傷すら負わせられていない、流石に二人も焦りを感じ始めた様だ。
秋は———自らの考えを実行する。

『夏、春……今より、俺は賭けに出る。　10秒間、そいつの注意を引いておいてくれ』

『ああ、何だ——』　『OK！！　任せて秋♪』

『———ああ、もう！！』

此処が……付き合いの長さ、生まれた時から付き合いの長さは、誰にも負けない。

兄妹の信頼の高さをこの場面で活かす。　秋は二人が奴の注意を引いてくれている間に、

”探す”———何者かを、集中する……どんな音でも逃さぬ様に———！！

「……………」　”カシヤ”

見つけた！！　そう感じた瞬間、秋は瞬時にアクセレイガンの引き金を観客席に引いた。

秋の突然の行動に驚く二人……そして、結果は直ぐに現れた。

「え……？」　「なっ！？」

つい今ほどまで二人の猛攻を流し続けた
ライオトルーパーが瞬時に赤、青、緑のエネルギー体に別れ――
―消えた”
そして―――”観客席” 銃口を向けつつ、秋はじりじりと距離
を縮める。

「今度は……何が狙いだ？」

「お前達の様な戦士を撮る……俺の目的は変わらない」

観客席……何らかの方法で姿を隠していたディウオーズ、片手には
カメラガンが握られ、
もう片方の手は……煙を上げていた。 秋の光弾をその手で受けた
からである。

銃口をディウオーズに向けつつ、二人も秋の元へと集まった。

「秋、アイツは……確か？」

「2日前に本社前に現れたって言う……所属不明の、だよね？」

「そうだ……所属不明、そして、目的不明……の戦士」

秋の言葉に……ディウオーズはカメラガンを左太腿にセットすると、
困った様子で頭を掻く。

「目的を今言った通りなんだが……まあいい、8割済んだからな」

「何……？」

「どう言う事よ……？」

「あああああっ！―」

ディウオーズの解答に困惑する秋と春、そんなディウオーズに対し
て、夏は迷わず引き金を引く。

「まどろっこしいんだよ!! てめえは、オルフェノクか、それとも人間か!!」

叫びと共に、放たれる光弾をディウオーズは避けようとしなかった。しかし身じろぎもしない、銃撃に晒されつつディウオーズはディウオーズドライバーを取り外し、ホルダーからカードを1枚取り出す。

「——秋、春!! 何突っ立ってんだ!!」

「う、うん……!!」

「……………」

秋と春も、ディウオーズへの銃撃に参加する……更に激しさを増した銃撃に、ディウオーズの身体は揺らぐも倒れない。カードをドライバーに挿入し——

「ん? ふっ、どうやら面白い事が起きたらしいんでな、また会おう」『ATTACK RIDE……INVISIBLE!!』

「あ……!?!」

「ま、待ちやがれ!!」

無論制止など聞く筈もなく……ディウオーズは先程のライオトルーパーと同じ様に、消えた——後には、空いた観客席と、銃撃によって破壊された観客席だけ。

「あゝくそ!! あの野郎……今度会ったらぶちのめしてやる!!」
「同感……ああ言う男、嫌いだよ」

「（ただ撮るだけ、だと？ 其れが何につながると言うんだ……！
）」

後日———3人の元には、サイガが無断で部隊を引き連れ、解放軍のアジトを襲撃した事。

黒い戦士”ディウォーズ”が現れた事、そして、オーガの資格者が決まった事。

その侘びとして……最高の装備とスタッフが揃えられた特殊チームへ組み込まれる事が伝えられた。

F o r c e M i s s i o n & q u o t ; R I O T R O O P E R & q u o t ; .

ようやく……中盤に突入です。

この分だと、ブレイドの世界は何時になる事やら……（汗）
では、次回の更新まで、失礼します。

F i f t h

M i s s i o n & q u o t ; P S Y G A 、 K A I X A 、 D E L T

2003年10月5日 午後0時55分 人類エリア” 破棄遊園地・
解放軍地区”

人類エリア……この単語が出来てから、其れほどの時は流れていない。オルフェノクとの

種族間バランスが変わりながらも、命を賭して集まり、手を取り合った人類が、仮面ライダー、

そして、善意のオルフェノク達の助けを得て、ようやく安全なエリアを作り出したのだ。

其れが此処、使われなくなった遊園地を拠点とし、園内の広場に戦う力を持たない人間達の家を作り、

その四方、東西南北に解放軍の人員がバランス良く配置されている。

もつとも……心許ないのは変わらない。 其れは住民の誰もが思っている事だった。

残り” 4111人” ……世界中の人類が集まるこの場所、日々を生きる住民たちに、希望は見えなかった。

そして彼らを守る、解放軍にも――――

「おい……」

広い、と言えば広い室内……静寂した空気の中で、一人の男が納得いかなそうに呟く。

その男は若い、顔はイケてると言えるだろう。しかし……首まで伸びた長髪のウルフカットの髪は

良く見ると痛んでおり、服装も御世辞には御洒落とは言えない。所々痛んだ、青いジーンズに

無地の半袖シャツ。其処に迷彩色のベストを着込んでいるだけだ。適度に日焼けした筋肉質な肉体……

此処まで揃えば女性の一人や二人は興味を惹かれるだろうが――
――今現状の男の状態は非常に情けないもの

だった。そう、壁際に置かれたボロイパイプ椅子に縛られているのだから。

「おい……!!」

「……………」

彼の苛々……恨みの視線は、中央に置かれた木造のテーブルに置かれた箱型テレビを真剣に見つめる女性に

向けられていた。彼女が見つめるテレビの内容は一言で言えば”指名手配”のニュースだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0343t/>

仮面写真家“ログ”の一生

2011年12月3日17時59分発行